

# 読書週間十年の回想

布川 角左衛門

◇ 出典 『読書推進運動協議会の二十年』

1980年（昭和55年）2月25日 発行

社団法人 読書推進運動協議会 編集／発行

\* 初出Ⅱ 第十一回読書週間記念冊子 1957年（昭和32年）発行

昭和22年を第1回として毎年行われてきた読書週間も、第10回を数えるにいたった。十年ひと昔というように、10年といい、第10回ともなれば、なにか一段落のような気がするものである。と同時に、過ぎ去つてみれば、いつしか山のかなたに消えてしまったような感もともなう。その歩みの跡をあらためて回想するとき、私には、いろいろなことが思い出される。また、さまざまな感慨がおのずからわいてくる。そして、たとえ行事面には、ときに若干の起伏消長があつたにしても、この運動が、泉から流れる水のように、全国に普及し、深く浸透した10年の歴史を、まことに尊く思う。今日では世間一般に、必ず行われる秋の年中行事と考えられるようになってゐる。よいものはみずから育ち、また育てられる。といつても、私は、これに当初から関係してきたひとりととして、よくここまで育ててきたものという感慨もおおい得ない。

が国の独創ではなく、わが国だけのものではない。アメリカで約40年前から開始された Children's Book Week がそのはじめといわれ、現在では、世界30余か国で催されている。ということは、いま10回を数えているわが国の「読書週間」も、その仲間入りをしていけるような形である。しかし、われわれは、わが国に立派な「前史」のあることを見逃してはならない。むしろ、わが国ではそのほうが歴史がながく、また、それがあつたればこそ、急速にひろがり、しかも浸透してきたともいえるであろう。その前史とは、どのようなのであるか。いまとなつては、いつそう、山のかなたに消え去つて、忘れがちになつたそれを、まず顧みることが適当な順序であろう。読書週間の歩みは、どうしても、そこから始めなければならぬ。

それは、もちろん、戦前である。今から33年の昔に遡る。その当初の大正13年（1924年）といえは、関東大震災の翌年である。大震災の惨害によって、東京の多くの家や施設とともに、新旧、膨大な量の出版物が空しく消失してしまつた。そのことは、いまではすでにひとつの語り草のようになつたが、あらためて述べるまでもないであろう。その規模に大きな違いはあるにしても、世情と人心に与えた打撃は、こんどの震災に類するものがあつた。そして、漸くにして復興にむかつた時機に、日本図書館協会が具体的に計画した読書運動——これがわが国における読書週間の発端である。今日いう読書週間の第1回が、終戦後2年目に行われたことと、世態になにか一脈相通するものがあるかもしれない。「11月17日から23日まで」の1週間を実施期間と定め、全国各地に、読書の鼓吹、図書文化の普及、良書の推薦などを主要な目的として、さまざまな行事がはじめて展開されたのであつた。

これには、出版界の諸団体も参加し、それぞれの組織を通じて、その推進に協力する態勢が作られた。そして、これを年中行事としてくり返し、年を重ねること10年。時代は大正から昭和に移つて、昭和8年。読書週間は「図書館週間」と改称され、図書館界によつて、その単独主催の形をとることになつた。すなわち出版界のほうでは、それと密接な連関をもちながら独自に、「図書祭」なるものを計画したのである。

この「図書祭」の由来については、当時、出版界の有力団体であつた「東京出版協会」の25年史には「図書を尊重することは古来の美風である。しかるに近時図書の刊行多きを加ふるにしたがい、図書尊崇の念薄らぎ、ややもすれば図書に対する真の反省謝恩の徳を閉却するがとき風をみるにいたつた。ここにおいて、本会はまず精神運動として「図書祭」を興し、図書に対する反省謝恩の美風を涵養するの計画をたて、昭和8年2月10日、図書祭に関する特別委員7名を選任して調査を進め、爾来しばしば委員会を開き具体策の樹立に努め、同年9月にいたり、社団法人日本図書館協会と提携して同協会の協力下に厳肅な祭典を執行し、図書の功績を讃え、敬虔なる感謝を捧げ、もつて図書ならびに読書に関する世人の自覚を高め、良書に親しみ、良書を尊ぶ美風を振興することを企図した」と記されている。そして、同年11月1日、当時の東京商科大学一橋講堂で、「図書を神霊として厳肅なる祭典を執行」したという。また、東京書籍商組合でも、これに和して式典を行い、「図書祭」は出版業界の行事として、「図書館週間」に呼応し、以後、毎年行われることになつた。『25年史』によれば、その第1回には、鳩山文部大臣その他の祝辞のほか、上田萬年博士が記念講演を行つてゐる。第2回は日比谷の公会堂。当日は雨天であつたにかかわらず、来会するもの1千余名。文字通り「まつり」であつて、まず信祓の儀からはじまり、奏楽裡に降神、奉幣、献饌。ついで齋主の祭詞奏上、主催者の祭文朗読など、おごそかに取り運ばれた模様である。第3回には、後藤内務大臣その他の祝辞、三上参次、下村宏の両博士が記念講演。また、「昭和11年の第4回図書祭執行の前日には、とくにJOAKよりニュースとして、図書祭挙行

のことが放送され、第5回の図書祭当日には、J O A K 『子供の時間』において『ラジオヴァラエティ図書祭』が放送された。この事実が、図書祭精神が、日本放送協会に理解せられたことを物語るものといえ、図書祭は全国的に普及する実をせしめた」と記して、その時代の一端をうつつしている。

かくて、「図書祭」と「図書館週間」とは、型のように毎年くり返されること5回。時は移つて昭和13年。この年に発した支那事変の影響は、意外に大きな波紋を生じ、「図書祭」は、11月10日の国民精神作興に関する詔書渙発記念日に改められ、政府の「国民精神作興週間」と呼ぶることになった。一方、「図書館週間」は、その翌年、国内事情の全面的な変化がだんだんと表面化するにおよんで、文部省から出された「一般週間運動廃止令」なるものによつて、頓挫の運命にあひまつた。こんな廃止令は、いまいち思えば、まことに珍妙である。また、読書は、いつの世にも変わりなく勧められなければならないのに、時代の制約は、まことにおそろしい。ここにいたつて図書館協会は、運動内容をそのままに表した「読書普及運動」とやむなく改称し、期間を

11月8日から12日までの5日間とし、なおもこの流行に努めた。私は、図書館協会のこの熱意を回想し、まことに尊いものとしてとくに讃えたい。読書運動や「読書週間」の底を流れ、それを支えるものは、第一にはこれであると思う。昔も、今日も、また将来も。

しかし、その「普及運動」も、そのような情勢下にあつてはやはり氣勢ががらまず、低調であつたという。これに反して、図書祭は、純然たる精神運動として成立し、しかも神事に則つたものであつただけに、当時の世相を加味して、「皇軍の武運長久」を祈ることが含められ、11月10日、全国の主要都市で盛大に執行されたと伝えられている。時局色ゆたかに、といつても、濁流が土砂を押し流すように、戦争にむかう事態は、この昭和14年でついにこれにも終止符をうたせた。そして、戦時中は、たとえ考へる人があつても、その復活などが実現するはずがない。出版界は大きな制約のもとに年々ともに変転し、辛うじて仕事を続け、読書会も自由と活力を失ひ、全体があわただしい暗い命運をたどつて、昭和20年8月15日の終戦となつた。ということは、大正13年に、日本図書館協会によつて提唱された読書週間運動は、昭和14年

まで、都合16年間、変遷はあつたにせよ、主としてその不撓な努力によつて続いたわけである。それが同時に、今日第10回を数える「読書週間」の貴重な前史をなすものである。

さて、このような経緯をみるならば、戦後の読書週間は、その復活ともいえるであろう。占領下、世は敗戦後の混沌のとき、用紙は依然として割当であつたとはいへ、出版界は急遽として活動を開始し、また、一般の読書に対する関心も禁をとかれたように活発に蘇つた。また、新しい日本の指標として「文化国家の建設」が多くの人々によつて、強調された。このようなとき、当時の日本出版協会の会長・石井満氏に対してひとつの文化運動として「読書週間」のことを熱心に進言したのは栗田確也氏であつたという。栗田氏にしてみれば、やはり復活の意であつたであろう。それには、C I Eの出版顧問としてきていたメルチャー (Frederic Melcher) 氏によつて、アメリカの Children's Book Week の示唆が加えられた。そして、ここに、今日におよぶ「読書週間」が、新しいもののように企図されるにいたつたのである。

た。日本出版協会が出版業界の中心的な団体であつただけに、関係諸団体からもきわめて時宜を得た計画として取りあげられた。すなわち、同協会を中核として、「日本図書館協会」、日本出版協会から離れてきた「自由出版協会」(のちの全国出版協会)、出版物取次の一元的機関であつた「日本出版配給株式会社」、小売書店の連合組織である「日本出版物小売業組合全国連合会」、その他、図書館、報道および文化関係の団体30余が参加して、新構想のもとに「読書週間実行委員会」が結成され、発足したのである。かくて、日本出版協会がその主力となつて準備を進めたのであつたが、これが戦前のように図書館界でなく、出版界の呼びかけによつて取り運ばれたことは、ひとつの相違である。当時の趣意書によれば、「文化国家『新日本』建設に出版文化の受け持つべき使命の重大性をみずから再認識するとともに、これを一般に認識せしめ、出版文化向上ならびに読書運動促進に資すべき各種の総合的文化行事を行う」ことを目標として掲げている。そして期間を、アメリカの Children's Book Week が11月16日から1週間であるのになら、11月17日から23日と定められた。また、行事

は、全国的行事と地方的行事の2本立てとし、主として日本出版協会の組織を動員して、東京、大阪、京都、札幌、長野、名古屋、福岡などで実施されることになつた。その多彩な行事の規模にせよ、その実行につくした全般の労にせよ、あるいは醸金にせよ、出版界および関係業界がこぞつて積極的に協力したことは、まことにばなしい再出奔の姿であつた。

私は、東京における各所の催しものを思い出す。例えば、白木屋を第1会場として、朝日新聞社、大日本印刷、凸版印刷、大化堂(編集部注) 現 精興社)、興國人絹パルプ(編集部注) 現 興人)、三菱製紙などの後援のもとに催された「本になる迄」の展覧会。印刷機械や製本設備などをもちこんで雑誌や書籍が発行されるまでの工程が、実演と図解で容易にわかるように設営された。また、用紙の生産過程を写真や実物でせしめ、さらに明治以降の特色ある装幀本250点が出品された。そして会場は、連日にわたつて、にぎわい、人気を呼んだ。観にくる者は老若男女を問わず、小学校の生徒はノートをとり、人間の皮で装幀した天下の奇書は、とくに好奇心をそつた。また、第2会場の高島屋で催された「辞典・海外図書・翻訳書展」

は、占領治下、各国代表部出品の新刊図書80冊、終戦後に刊行された翻訳書約80冊、辞典協会の手による各種の辞典とその作成資料、あるいはリーダーズ・ダイジェストのできるまでの資料など、それぞれが色とりどりに展示された。あるいは、東京女高師（いまの御茶の水女子大学）では教科書の展覧会が行われ、これには高松宮がおいでになった。その他、美術学校での「書籍と印刷に現れた近代日本美術展」、交通博物館における交通関係の出版物と児童出版物の展覧会など、これらを巡覧するだけでも大変であった。

また、放送関係では、とくに読書運動を中心としたプログラムが組まれ「話の泉」には石井会長が特別回答者として列席した。あるいは3つの記念講演会。その他、じつに盛りだくさんな記念行事は、主催する側にとつても、一般の人々にとつても、ちょうど冬がすぎ、春を迎えて一時に咲いた草花のような趣であった。そして、その著しい反響は、「1週間では惜しい」という嘆声を残し、翌年への期待と希望を約束して終わった。

ついで翌年、第2回の実施にあたって、まず打ち出されたのは、期間を「文化の日」、すなわち11

月3日を中心とし、その前後2週間に改めることであった。第1回の成功がこの変更の誘因になったということはいうまでもない。第1回のときと同じように、実行委員会が全体を主宰するとともに、各団体がそれぞれの立場において、行事を催すように勧奨された。また、地方への呼びかけも強化された。かくて、第2回もさまざま

な行事によって、好都合にこの2週間を記念したのであった。以後、各年における行事の委細は、別掲「年表」のしめすとおりであるが、そのひとつひとつを追うことは、いたずらに煩雑にもなろう。それを見ていただくにしよう。もちろん、同じことが漫然とくり返されたわけではなく、実行委員会はもっぱら中央にあつて、ポスターを頒布し、この運動が、

できるだけ全国的に盛りあがることに努めるとともに、社会事情の推移にしたがい、時に応じ、中央の行事を主催した。また、参加団体も、いろいろとくふうし、労苦をともにした。たとえば、小売書店の全国連合会が、「おくりものにはよい本を」の標語を掲げ、とくに「プレゼント図書目録」を作つてサービシしたり、その他、諸団体は、それぞれみずから多額の費用を支弁して、じつに多くの行事

を催してこれに和したのである。私は、第4回（昭和25年）の開始を控え、「日本読書新聞」に、こんなことを書いている。「読書週間もすでに3回を経、今日においては全国にひろまり、特別な示唆や宣伝がなくても、秋の年中行事として迎えられるようになった。読書週間運動を中央から地方へ、都市から町村へ、特定の団体から一般の職場へ、家庭へ！これは、読書週間を企図した人々の深い念願にほかならない。……この週間には、各地において書店、図書館、学校、新聞社などをはじめ、多くの文化団体を中心となつて、読書会や展覧会その他、さまざまな催しもの運動を行い、また行おうとしている。しかし、これが、それらの行事の衝にあつている人々だけのものではないことは、もちろんである。ひろく書物に関係ある世界の、うるわしい共同の饗宴であり、とくに本を読む者万人のためのものである。催しものも運動も、本を読む人々のためにあり、本を読む人々とともにある。地域を問わず、年齢にこだわらず、あるいは職業に関係なく、本を読む人々すべてが、この週間をみずからのものであり、心を寄せ、意義あらしめることを切に期待する……」と。

また、別のものに、「……読書週間は、書物や読書をめぐる世界のみんなの年中行事として、全国によく普及した。聞くところによれば、愛知県一宮市では、市がこの行事協賛のために予算を計上したという。私はいろいろな行事にあたつている人々の話を聞いたり、あるいは地方から続々と寄せられる報告に接することに、この読書週間運動が、3年にして、よくもここまできたものと、多大の感激を覚える。……いうまでもなく、この週間はひろく出版文化の普及、読書活動促進のために、よい機縁を作るときである。……読書週間本来の指標は変わらなくとも、とりあげられる具体的な主題は、必ずしも一様である必要はない。たとえば、今年がわが国文化史上に記念されるべき『図書館法』の実施をみたことであり、図書館界や出版業界が中心となつてとくに『読書施設の充実』と『良書の組織的普及』にいつその力を注ごうとしている。もちろん、こうしたことは、容易に、短時間になしとげられるものではない。私は多くの人々の理解ある支援によつて、たとえば、近くの学校図書館を充実しようとする気運が、この週間にますますわきあがり、着々と実現せられることを切に願う

るものである……」と書いている。さらに「……一般読書界の問題のひとつとして、とくに書物を買う便の乏しい地方の読者のために、本の送料を軽減することについて、世論を喚起したい。今日『本がほしくて買えない』とは、読書人の歎きであろう。このうえに、地方の人々は本を注文するとき、多額の送料のために、いつそうその歎きを深めている。たとえば150円程度の単行本1冊の場合、送料の小為替料10円ならびに書留郵便料38円のほか、送料として普通小包で25円ないし35円を要するというのが、実情である。こうした実情に対して、少なくともこの送料として郵税を軽減する特別措置の講ぜられることは、けつして個人の利便のためだけにではなく、地方の教育、文化の向上のために、その招来する福祉は、きわめて大きいであろう。私は、この機会に、為政者をはじめひろく一般の同情ある助力を、地方の読者とともに要望する。……」と述べている。すなわち、読書週間は、たんにその時期に催される表面上の行事だけでなく、この機会をとらえ、将来につらなる問題を強調することにも、力が注がれるにいたつた。

中央の行事にしても、講和条約の発効した27年、第6回からは、

待する……」と。

海外出版社の参加をみ、「内外優良図書展」が新たに加えられた。それも29年には、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツなど17か国80余の著名出版社から出品され、それらは、内容ばかりでなく、外国の造本技術をしめした。と同時に、わが国の読書週間を海外にひろく知らせる機縁ともなった。なお、これは第9回までつづき、ここに展示せられたものはのちに実行委員会から国立国会図書館に寄贈され、今日「読書週間記念文庫」として、一般の利用に供せられている。

また、実行委員会が読書普及のために寄与した人々を顕彰したことも、特記されるべきものであろう。すなわち、第7回（昭和28年）にあたり、点訳奉仕者を顕彰したのが第一である。これは、読書の便をはかることよって、不幸な盲人の心に光を与えようと、仕事の余暇をさき、なんの報酬も受けず、一般書を点字に訳して日本点字図書館、日本ライトハウス、各地の日赤図書館その他に寄贈し続けた篤行者、新幸之輔、両角豊、佐藤みよ、山本正代の諸氏をはじめ62氏を顕彰し、その労に謝意を表したのであった。私は11月4日、神田駿河台の雑誌記念館で関係者が集まり、顕彰式を行った光景と

感銘を忘れることができない。その人々の話は、まったく隣人愛にあふれていた。そして、この隠れていた美談は、放送にもとりあげられ、点訳奉仕について一般の関心を深め、認識を新たにすると同時に、失明読書人に一段の光明をもたらす動機をなした。

その第二は第8回にあたって、毎日新聞社の「読書世論調査」の事業を顕彰したことである。これは、同社が、昭和23年に「読書週間」が行われるに際して、その協賛事業として開始し、逐年、わが国における読書人の生息と傾向を調査し、貴重な記録を蓄積してきた大事業である。10月29日、後楽園で催された「出版文化を讃える会」の席上、はなばなくその顕彰式が行われたが、「文部大臣奨励賞」もそえられ、あまりひろく知られていなかかった同社調査部の功を世にしめたものであった。

もちろん、これらは、実行委員会が行ったものの中から選んだ一部である。地方において、それぞれの計画によって行われた行事は極めて多く、展覧会、講演会のように表面に現れたものばかりでなく、読書指導、読書調査などのように地味な仕事も各所で行われた。これらが週間行事として光彩をそえるとともに、出版物の普及、

読書の奨励に寄与したことの大きさは、あらためていうまでもない。ということば「読書週間」の真意が必ずしも2週間にとどまらず、「読書年間」に通ずるものを含んでいるからである。それらは、毎年、行事一覧として報告書が作られたが、私は、それを見ながら、いつも、その衝にあたった人々の労をありがたく思うとともに、読書週間の歩みの一里塚のように感じた。

さて、私はここに挿しはさみ、秋の「読書週間」に相對して春に行われたことのある「雑誌週間」について、ふれたいと思う。というのは、これがとくに雑誌の普及を目ざしたとはいえ、両者には相通ずるものがあるばかりでなく、昭和28年以來は、秋の「読書週間」に合体して、今日にいたっている推移があるからである。

じつは、この「雑誌週間」にも歴史的にたどると、前史がある。やはり戦前のことであるが、昭和7年（1932年）の9月、京都の書籍商組合が「雑誌祭」と称して単独で行ったことが最初であった。その翌年には、日本雑誌協会がこれを受けつぎ、東京雑誌販売業組合も参加し、雑誌文化の正しい認識と売れ行き倍加を標榜して、9月7日から20日までの2週

間、都市において、講演会、雑誌展などを開き、ポスター、パンフレットを配布して、全国的な行事をしたのである。聞くところによれば、雑誌のもつ特殊性から、そのはなやかさは、「図書祭」を圧するほどであったという。といつても、とにかく、一方に「図書祭」あり、ともに秋の出版界ならびに読書会をにぎわして続けられること8年。これもまた「図書祭」と同様に、昭和14年に中絶した。

このような前歴があつて、戦後、昭和25年（1950年）4月、雑誌の出版社の多い全国出版協会が主となり、これを復活せしめた。当初は「雑誌まつり」と称して4月25日から5月10日まで行われたが、翌年からは「雑誌週間」と改称し、4月27日から5月9日まで、引き続き催された。かたや、日本出版協会を主とする「読書週間」、かたや全国出版協会を主とする「雑誌週間」の観を呈したが、時勢は動き、雑誌週間は昭和27年で打ち切りとなり、29年からは「読書週間」一本にされることになった。そして、この裏面に、「読書週間」の出版界を代表する団体が、日本出版協会も全国出版協会も含めた「日本出版団体連合会」の手に移り、以來、第10回までこの連合会が主となって行うことになつ

た事実もひそんでいる。

読書週間は歩んできた10年。その間、実行委員会の構成団体にも変遷があり、その歩みが絶えず順調に前進してきたとばかりはいえない。このような運動にも、やはり中だるみ状態をまぬかれないものである。たとえば実行委員会の資金は、もっぱら出版業界、取次関係、広告、用紙などの業界から醸出されたが、私は、5回、6回のころ、資金集めに苦慮したことを思いだす。いま、私の記憶にいきいきと浮かんでくるのは、その時代に行事のため、また資金集めのために相ともに奔走した人々の姿である。しかし、それは、10年のなかのある年のことであつた。第10回はそれらと比べものにならないほどの熱意と協力が各方面から注がれ、その点で立派に10年は記念された。このことは、関係者にとって大きな感激であつた。便宜上、私は、第10回にあたり、「今年の読書週間」と題して、「日本出版団体連合会会報」に寄稿した報告をここに転載し、あわせて実行委員会が、諸行事とともにとりあげたふたつの運動について、その説明にしよう。

「……今回、出版界はもちろん、関係各方面から、物心両面にわたり、予想外の熱意と、前例のない

ほど積極的な協力をよせられたことは、ひとしおの感銘である。まことにありがたいと思う。ただ、それにひきかえ、中央の実行委員会の行事計画が例年とあまり変わらず、第10回を記念するとしては、いささか物足らぬと評せられるかもしれない。私は責任を負うひとりとして、ひそかに心の満たされない思いはあるが、強いていうならば、中央の実行委員会の主催する目にみえる行事の多少、あるいは華やかさは必ずしも読書週間運動全体の盛況をしめすものではない。ということは、実行委員会の役割は、各方面に通ずるスイッチをいれることにある。したがって全般からみれば全国各地の協力体勢は、例年にも増して進展し、自主的に相当盛大かつ意義深い諸行事が準備され、その気運は一段とよりあがるに違いないと確信している。」

「今年、実行委員会が新しく、とくにとりあげた運動としては、ふたつある。すなわち、ひとつは運賃値上げ反対の署名運動を展開すること、ほかのひとつは青少年の読書活動に献身してきた民間人

者層を開拓する運動の提唱である。この第一については、いまさら説明するまでもなく、国鉄が運賃値上げをしようとしているとき、雑誌書籍を別途扱いにするような大きな文化政策の断行をひろく世論に訴え、これを強く当局に要望しようとするものである。」

「今日わが国の実情として、出版社はほとんど東京に集中し、雑誌も書籍も、その全発行部数の98.6%が東京で生産されている。そして、東京においては、雑誌は15%、書籍は25%が消化され、ほかは地方に送達されているという。自動車輸送もさかんになったとはいえ、国鉄を利用してものが、もちろん大量である。したがって、国鉄運賃の引き上げが、とくに東京を遠く離れる地方の購読者や小売書店におよぼす影響は、出版物の普及、読書勧奨運動のうえからもけつして等閑に附することのできない切実な問題である。地方文化の発展を軽視し、現在以上に負担を加える傾向は、これをなんとか是正し阻止しなければならぬ。すなわち、この機会に、購読者大衆を啓蒙し、世論を喚起し、意を一にする出版文化普及連盟、教科書協会や雑誌協会などの運賃値上げ反対運動をいっそう強化しようとするものである。この週間中は、全国の小売書店の店頭、各図書館に署名簿がそなえられ、その成果は来月20日ころま

で実行委員会へ届けられる。私は、地方の小売店や図書館の人々が、煩を厭わず、これに協力してくれることを期待し、出版業界からも進んでそれに声援の送られることを念じている。」

「第二は図書館協会との共同の事業である。民間篤志家であるいは私費を投じ、あるいは中心となつて、青少年のために読書の便をはかり、これを補導している人々は多々あるが、特色があり、顕著な実績をあげている松本市の職人読書会をはじめ六か所に対し、感謝の意を表し、激励をしようとする計画である。これには、文部大臣の奨励賞が与えられる。このこととあわせ、いままでもあまり問題に

しなかつた不読者層の調査研究を行い、これを開拓しようとする気運を助成することにした点について、いささか特筆したいと思う。」

「あらためていうまでもなく、一般に出版物を企画し、発行する場合に、その読者を想定することは、当然の前提要件である。しかし、一般にこの想定される読者といふものの実態、あるいはその分布がどれだけ適確に把握されているであろうか。もちろん、各出版社は、その発行する出版物について、みづからの所見にしたがい、それぞれひとつひとつ考究して、たとえ

ば発売部数などを定め、取次もまた巧みに調節を行つてはいる。と

いっても、出版界から続々送り出される膨大な出版物全体と、それを迎える読者層全体との関係を篤と考へてみる必要があるはしないか。今日、新聞、雑誌や書籍その他がよびよびことごとく大量に刊行され、印刷文化あるいは出版文化はいかにも盛況であるようにみえても、これらを購読し利用する者は、わが国の人口からみれば、まことに少なく、限られている。むしろ、限られた少ない購読者層にむかつて、各社が自分勝手にこれならば求められるであろうと競いつつ、ほとんど集中的に供給しているのが現状ではないか。生産過剰の声もきく。すなわち、読書普及運動の立場からは、本を読む層の実態と同時に、全国にひろがっている本を読まない層、あるいは読めない層の実情を調査し、たとえ徐々にせよ、これを転換させる

ところに一歩前進しなければならぬ。しかも、この不読者大衆がいかに多いことか。わが国は文盲の少ないことを誇っているが、ある調査によれば完全文盲が総人口の1.6%、カナや数字くらいならば読める者が11%あるという。合計27%である。しかし当面の問題はこれではない。学習時代には本を

読む能力をもちながら、以後は本を読まない成人の階層である。ある県における推定では、読書をしていない成人が88%におよんでいるという報告がある。この不読者現象の解決に少しでも拍車をかけることは、出版界のために、図書館界のために、さらにひろくわが国読書文化の向上のために、きわめて重要な課題である。」

「従来、読書週間には、読書活動の促進、読書施設の充実に主眼がおかれてきたが、10年を機としてこの課題をはつきりとりあげたことについて、何人も同意するであろう。もとより、このようなことは、わが国の文化政策上の大きな問題のひとつである。したがって一時的でなく、不撓な関心と各方面共同努力を要することにせよ、出版界の発展も、読者層の合理的な把握とともに、この広汎ないわゆる不読者層の開拓に直接関連している。われわれは、機会あるごとに読者の実態をますます真剣に考え、これを知り、読者層の拡大をはからなければならない。図書館界を支援して、この促進の契機を作ることは読書週間にさらに具体的な意義を加えるものと思

う。」

第10回は、このふたつの運動が組織的に行われるとともに、一般

的にいつて、事実いつその大きな力となった。地方で行われたその行事の委細は、第2部で報告されている。いうまでもなく、読書週間をできるだけ意義あらしめること、これが毎回の課題である。この週間になにをするか。私は、この第10回にあたり、高知県の教育委員会が配布した「読書週間指導要領」を紹介しよう。これは参考になるばかりでなく、地方においていかに熱心によく行われているかを実証する一例ともなるであろう。

× × ×

### ●読書週間指導要領

#### 高知県教育委員会ほか

「文化の日」を中心とする読書週間は、1947年の第1回以来、回を重ねて第10回を迎えることになりました。この運動も年を追ってさかになり、いまや世界の31か国とともに、新しい文化国家日本の年中行事のひとつとして、文化関係のあらゆる組織や団体はもちろん、職場や家庭にいたるまで浸透し、国民的一大文化運動となつてきております。

本年の重点目標としては、婦人読書層の開拓を掲げております。

「本を読むお母さん」——今年の読書週間ポスターの絵です。なんとあたたかい情景でしょう。「本を読みたくても時間がない、どんな本を読んでいいのかわからない」というような切実な婦人の声が盛りあがっているとき、この読書週間をきっかけとして、なんらかの明るい見通しをもちたいものです。また、学校図書館法施行後第4年を迎え、内容的にも着々と整備拡充され、文部省提唱の「青少年巡回文庫」も、本県ではすでに準備段階を終えて実施に乗り出した意義深い年でもあります。正しい読書指導により青少年を不良文化財から守ることは、目下の急務であります。

こういった意味で、各学校はもちろん、図書館、公民館、PTAその他各種団体などでは、それぞれ意義のある行事の計画実施や、恒久的な施策の立案施行など、この週間の趣旨が十分生かされますようご協力をお願いします。

○各地で実施してほしい行事など  
この週間に各地方で、市町村教育委員会が中心となり、婦人層に対する読書の呼びかけと適切な指導、学校図書館法施行4年目としての行事、「青少年巡回文庫」による青少年を不良文化財から守る運動など、各学校、図書館、公民

館、団体などに呼びかけ、それぞれの立場で独自の行事や計画を実施することにより、この週間の趣旨の普及とともに、実績を挙げられるようお願いいたします。なお、各市町村教育委員会その他で実施してほしい行事などを次に掲げてご参考に供します。

#### 一、各市町村教育委員会

管内の学校図書館の設置および整備拡充、図書館ならびに公民館図書部の飛躍的な充実、図書館法による地方図書館設置基準到達への推進、各団体を通じて、とくに婦人層への読書の普及啓蒙とその指導などにつとめる。

#### 二、各学校

学校図書館充実のため、市町村当局に対する学校図書館予算増額運動と並行して、校下民、PTA、篤志家の寄附、児童生徒の作業収益、資料収集、その他の方法による蔵書増加、施設拡充の運動をおこす。児童生徒に図書館の価値および利用法を指導実習させるとともに、読書、図書館に関する作文、研究、調査などの発表、その他の記念行事を行う。なお、PTA、児童生徒を通じて、家庭婦人の読書について啓蒙指導をする。

三、各図書館 公民館  
図書館、公民館図書部の設置拡充、蔵書増加運動、読書指導の場

をつくるなどの計画をたてて実施するとともに、図書館のない市町村では、公民館図書館としての機能をも發揮する。とくに読書指導の場としては、その対象の重点を婦人におく。

#### 四、各PTA

学校図書館法の内容と学校図書館の必要性を会員相互に徹底させる機会をつくり、学校図書館充実運動に対し、市町村当局へ働きかけるとともに、PTA自体による物的協力をはかる。児童生徒に対する良書の普及、俗悪な絵本漫画などの追放について、PTAとしての立場から家庭教育をも含めて指導にあたる。

五、各青年団  
「青少年巡回文庫」実施を機会に、図書館、公民館、学校などの読書施設拡充運動に全面的に協力するとともに、青年としての教養を向上させるため、読書グループの結成、読書会の開催などを計画実施する。

六、各婦人団体  
本年の重点が婦人の読書層開拓にあるので、読書グループの結成、読書会の開催などにより、家庭内での読書をすすめる。一方、読みたい本をいつでも手近な場所で見

める態勢をととのえるため、地域の図書館、公民館図書部の充実運動をする。

#### 七、その他各種団体

文化運動のひとつとして、本週間にふさわしい行事をそれぞれの立場から計画実施する。このほか、各市町村、学校、図書館、公民館、各種団体では、座談会、講演会、公聴会、討論会、研究会、展示会などを開催して、読書に対する認識と、読書生活の向上に資せられるようお願いする。

× × ×

以上、私の回想は、雑然として、しかも冗長になった。個人的で十分な感がある。しかし、わが国における「読書週間」の過去を知るために、多少とも役にたつところがあればと、思う。同時に私の念ずるのは、過去ではなく、今後の進展である。読書運動には際限はないにせよ、ひとりひとりが「読書週間」をみずからのものとして、これに参画し、相共になにかを記念するように。そして、新たな歴史がそえられるように。